

# 雨上がりの川

森沢 明夫 作

(163)

オカヤイツミ 画

第六章 それぞれのモノローグ(19)

## 【紫音の話】

甘美な陶酔にくらくらしたわたしは、もはやノーとは言えなくなっていました。

「覚悟は、あるってことだよね?」

春香は口を真一文字に引いて、じゅんじゅん小さく頷いた。

「お母さんは、何て?」

「紫音さんを信頼しているのです、お任せしておけば大丈夫って」

「そう」

「はい。でも——」

もう、我慢できない。

わたしは、ふっと微笑んでしまった。

そして、言った。

「そうね。じゃあ……、うん、分かった」

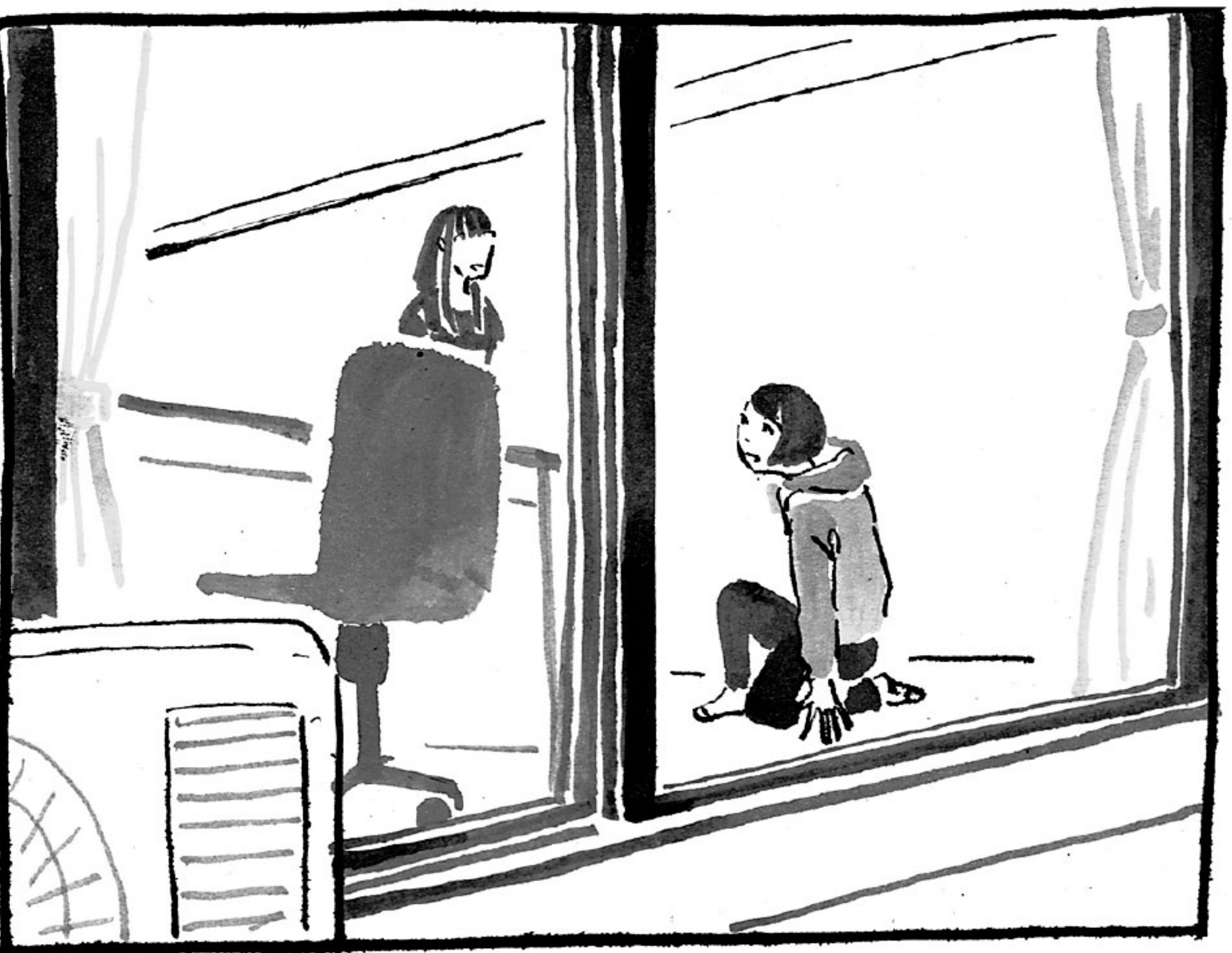
「え?」

「いいよ」

「えっ? いいって——、えっ?」

「仕方ないでしょ。だって、わたしにとって、春香ちゃんは特別な存在だからね」

あなたにとってのわたしも、特別な存在なのよね?」



女子中学生を相手に媚を売るような言葉を発している自分が、どこか情けなくも思えたけれど、それでも多幸感に震えそうになっていたわたしは表情を変えずに続けた。「春香ちゃん、この能力を手にして、何か困ったことが起こったら、すぐにわたしのところに来るのよ。必ず助けてあげるから」

「はい……」

「これは、約束よ。すぐに来ること。じゃないと、本当に危ないこともあるんだから」

わたしは、駄目押しで脅しをかける。

まだ十代前半の少女が、緊張と不安と決意の色をくると目には浮かべながら小さく頷いた。

この娘の霊能力を開花させる、か……。

今後、春香がわたしのところに来てくれる回数が増えるのなら、それは充分にいい話ではないか——と、わたしは、わたしに言い聞かせる。

「じゃあ、春香ちゃん」

「はい」

「さっそく、はじめようか」

「はい」

「じゃあね、まずは、その窓際の床で胡座をかいてくれる?」

「はい」

春香は緊張した面持ちでソファから立ち上がると、掃き出し窓の方へと歩いていった。